翻訳

カール・ディーツェル

# 「国民経済との関連よりみたる国債制度」(三)

池田浩太郎

## 四、資本の自然的発展

ここで与えられた資本の協働の定義から出発すれば当然次の命題が定立されうるであろう。すなわち、国民経済の前進は国民経済の資本増加とおなじ意味である、と。

端緒においては、国民の全労働は大部分同一の経済時期に消費される最初の最も原始的なる生計手段の生産に使用されざるをえない。次の年にはふたたび前年のはじめとおなじ状態となるであろう。ふたたびおなじ労働をおこない、これでもっておなじ入用を充足するのである。このようにして国民の経済状態はつねにおなじ状態のままにとどまっていることになるであろう。

しかしもし人が労働強化によってか、あるいは労働努力のより巧妙な適用および労働努力と自然力とのより巧

妙なる結合とによって、ひとたびある年に従来の生産量のほかにさらに加工するための余分の量の資源、したがって入用をより完全に充足する財貨の製造のために適当であるとみとめられる余分の量の資源、を自然から獲得できた場合、しかも次の時期に充足手段についての従来の入用の生産のための従来普通であった年々の労働のほかにこの完全化した労働をもうみだす場合には、人はこの年により豊かになるであろう。すなわち、人間の入用充足のためにより多数の財貨をもつことになるのである。かかる富の増大は労働増加の成果であるにすぎない。第二年度に労働の価値創造力を資本に作用させることができ、かつ固定させることができるためにこの労働は最初の年に資本をつくったのである。

たとえば鋤の発明または改善、〔家〕畜力の利用などのような労働のより熟達した適用についてのあたらしい進歩によって、すなわち、経営の完全化によって、やがて人は最初の生計手段の生産にあたって労働力の剰余をつくりだすことができるようになる。この剰余労働力をもって次の時期には従来の量の生計手段およびその原料加工の労働のほかに同量の原料をもまたうみだしうるのである。もしこのやり方を将来ずっと続行してゆくならば、国民経済の富の増大のかかる段階、この文化の進歩は永続的に獲得されうるであろう。そして国民は果てしない進歩の軌道へと足をふみ入れることになるのである。なんとなればつねに自ら再生産されるこの制度にとってはなんら挙示しうる限界がないからである。

第三の時期のはじめにあたって国民経済は、端緒の入用を充足する生計手段、新入用の充足のための、あるいは以前の入用のより完全な充足のための完成財の在庫、および労働によってこのような種類の生産物に変化させる原料の在庫というものを所有するにいたるであろう。

獲得されたかかる新財貨は国民経済を後退させることなしに全部消費しえたかもしれない。この新財貨は次の年にあたらしく生産さるべき同種の財貨によって完全に代替されたであろうからである。しかしやがてこの財貨のうちの一部分が特別の目的によりよく合致するように一層の変化をなしえたかもしれないことがあきらかになるかもしれない。そうなるとこの財貨の一部のみを消費し、できる限り早く一層の加工をなすために他の部分を貯蔵するようになるであろう。このために必要な労働力は従来の生産業務の一層の改善によって、とくに労働人口の増加を必然的に達成させる生産された生計手段の増加によって獲得されるであろう。

このようにして国民経済の息むことなき前進が必然的にうまれてくることになる。経済的諸目的充足のための手段はつねに増加され完全化されるにちがいない。しかしこれこそは同時に国民というものが前進しうる唯一の途でもある。

当初獲得された原材料をつねにより完全なる財貨にするためのかかる恒常的な一層の加工は、これに必要なる労働力の不断の存在を不可欠の条件とする。これは労働者の増加によってか、あるいは労働者の能率の向上や強化によって実現される。かくて一定労働のためには以前よりよりすくない労働者数をもって足りるようになるのである。第一の手段についてはここではこれ以上論じない。これは資本増加にあたって自然と生ずるものなのである。これに反し第二の手段は非常に重要である。なんとなれば資本と労働力との間の不可欠なる均衡をつくりだすためには資本の側でなにをなすべきかをこれはしめしているからである。この両者の正しい関係が阻害されたならば一方の剰余は無用に存在することになるであろう。

労働は自然力のより巧妙なる利用によって特別に上昇しうる。それゆえもし労働力が欠けると、本来利用すべ

S.50

き自然力の成果が欠けることになる。しかも自然力をより強力に利用できるならば労働力の欠乏を完全に代替しうるであろう。それゆえもし原材料がおおすぎるゆえをもって資本の側からこの均衡が阻害されるならば均衡再確立の手段はつぎのものとなるであろう。すなわち、この増大した粗生産物の一部分を速刻に享受財に変形するよう決めないで、むしろこれを自然力を利用可能にするか、あるいは自然力を害なきものにするのに貢献するような形に、したがって他の財貨の生産をたすけるような形にもっていかねばならないのである。これによって二重の利益が成立するであろう。すなわち、第一にはいまや労働力の欠乏によって資本は失われないだろうという利益、同時に第二にはかかる労働力そのものが強化され、将来においてはより大なる量の原材料が加工されうるであろうという利益なのである。

S.51

五、流動資本と固定資本

このことからわれわれは流動資本と固定資本という重要なる区分に到達する。かかる区分は非常に徹底的かつ顕著であるので資本概念がひとたび確立されるやただちに発見されるはずのものであった。いうまでもなくアダム・スミスもこの区分をはっきりと主張している。[1] スミスにとって流動資本とはその資本をひき渡す時にのみ資本所有者に所得を与えるような資本である。この資本はたとえば商人の商品や貨幣のようにおおくの人々の間を転々とし循環することによってのみそもそもそのサービスがなされるのである。これに反し固定資本とは、たとえば機械のようにその所有者をかえることなく利潤をうむものとスミスは理解するのである。

1) スミス、国富論、独訳、第二巻、六ページ以下。

たとえいろいろの財貨がこの概念規定にしたがってかなり正しく両種の資本に分けられたとしても、この概念

規定は徹底的に外面的でありかつ不充分であるというほかはない。残念ながら今日まで経済理論はこの概念規定をほとんど不変のまま受けついできた[1]。ただヘルマンのみが〔この概念規定を〕いちじるしく発展させたにすぎない。資本理論は非常におおきな恩恵を彼から受けているのである。ヘルマンは固定資本の場合には単に効用のみが、しかし流動資本の場合には資本自身が新生産物のうちに移行するという相違を明瞭に主張している[2]。しかしヘルマンはこれ以上の結論をここから引出そうとはおもわなかったようである。

S.52

1) セエ、前掲書、第一巻、二九〇ページ以下。ストルヒ、前掲書、第一巻、二九五ページ。ラウ、経済学、第一巻、一三一節。ロッシァー、体系、第一巻、六二ページ。J.S.ミル、原理、第一巻、一一〇ページ以下。大部分の著作家は(スミスが与えた流動資本の場合の所有変更のモメントを引合いに出すことを除いては)固定資本であるさまざまの事柄をあげ、また流動資本である種々の事物をあげる方法でしか両種の資本の相違を叙述しえていない。これは資本概念の探求にあたりわれわれがすでに注意したのとおなじ皮相な観察方法であろう。就中ロッシァー(体系、第一巻、六三ページ)もまた資本たりうる十箇の財貨クラスをあげることによって資本の概念規定を明瞭にしようとしたのである。十箇の財貨クラスは勿論ほとんどすべての財貨を包含する。そしてわれわれは結局ただちにほとんど全部の既存の財貨が資本を形成することを知るのである。しかしもしどこに資本の本質が存するかを理解すべきであるとするならば、われわれはそれら財貨がいかにして、いつ、またなぜ資本を形成するか知らねばならない。David Ricardo, Grundsätze der Volkswirthschaft und der Besteuerung, übersetzt von Edward Baumstark, Leipzig 1837.〔以下の引用ではリカード原理、独訳と略記する〕一七ページでは固定資本をもって徐々に効用の減ずるものを称し、流動資本をもって急速にうつろいやすいものをさした。これは正しいとはいいがたい。とはいえこの命題はみのりおおい思想をもっているのである。これについては後述するであろう。

2) ヘルマン、前掲書、六〇ページ。

もしわれわれが前のところで展開した資本概念を基礎にするならば、資本に属する財貨は次のような二大グループに分けられるであろう。すなわち、

流動資本は次の目的のためにただちに労働の媒介によって変形をうけることになっている財貨からなる。その目的とは人間の入用の充足手段に変化させるか、あるいは永続性のある形態にさせるかのいずれかである。永続性のある形態においてはこれら財貨は一層の生産をたすけるか、あるいは人間の入用の直接的充足のための永続的サービスをなしうるかのいずれかである。それゆえにこれら財貨はかかる労働の終了とともに以前の財貨としての形態では存在しえなくなる。なんとなればこれら財貨は給付しえたその全価値、全効用をもって新生産物の内に移行してしまうからである。もしこれら財貨が享受財に変化するならばこれはもはや資本ではない。またもしこれらが固定資本の新形成あるいは補完に使用されるならばこれはすくなくともはや流動資本として存在するのではない。それゆえ流動資本に属するものはまず変形がなされる財貨であり(変化材料 Verwandlungsstoffe)、ついでその財貨のたすけによってかかる変形を生ぜしめる財貨。それゆえこの場合財貨は全部消費されるものである(補助材料)。第三にはその使用によって労働がおこなわれるもの(労働者のための生計手段)である。

かくてもし人が流動という名称を、財貨がその変形過程において、いわば種々の生産的労働力の間を転々とし、一層の加工のために一財から他の財へと移行し、そして消費され、あるいは固定されるまでは休まないということと関連させるならば、この名称は全く当をえたものであろう。

S.53

固定資本はつぎの財貨からなりたっている。すなわち、具相的財貨を生産するため、換言すれば製造するため

に利用されることになっているような財貨、あるいは人間の入用の直接的充足をもたらすサービスを給付するために利用することになっている財貨とから成立しているのである。これら財貨はこれら財貨の協力によってできた個々の財貨の内に完全に移行することなく、それゆえこの財貨は一回の使用の後にも存続し、おなじサービスをくりかえし、通常何度も何度も給付しうる財貨である。固定資本はかくて永続的利用の一基礎となるものである。

上にしめした両目的に従って固定資本は所有者がその財貨によって直接に効用を引出すことになっているものと、他の財貨の生産に利用さるべく定められたものとに分けられるであろう。第一のものは利用資本あるいは使用資本 Nutz-oder Gebrauchscapital として、生産資本としての他の資本と対置される。われわれはここではこの問題についてこれ以上ふかく立ち入らない。この問題はわれわれの対象にはなんら影響をおよぼさないからである。[1)]

1) 利用資本からは物的・具相的財貨を獲得することができないので、勿論スミスおよび厳格なるスミス学徒は利用資本についてなにものべていない。スミスによれば、家畜小屋は資本に属するが、住居は資本とはならないのである（国富論、独訳、第二巻、一一ページ）。セエは利用資本を快適または利用生産資本と名づけ、第三の資本として固定・流動資本という両種の資本に付加した（前掲書、第一巻、二九〇ページ）。かかる三分法は不要であろう。利用資本は明白に固定資本に属するのである。

ヘルマンもまた前掲書、六〇ページで利用資本を営利資本 Erwerbscapital と並置した。しかして営利資本の細分類として「貸付資本」の名称で利用資本をあげたことによってあきらかに首尾一貫性の欠けたものとなったのであ

る。遊戯場を私が自分で利用するときには利用資本であり、私がこれを借受けるときは営利資本なのである。[注(1)] これは国民経済にとってあきらかに意味のないものである。それゆえいうまでもなくヘルマンもまた次の諸節でこれを訂正した。利用資本に対立するものは営利資本ではなく、むしろ（ロッシアー、体系、第一巻、六七ページで正しくのべているように）生産資本なのである。相違はただ次の一点にのみ存する。すなわち、利用資本の効用は直接人間的入用を充足する、しかし生産資本の効用は効用がまず他の財貨に移行するので、他の財貨の生産のためにのみその効用が必要となる点である。

注(1) ヘルマン、前掲書、六〇ページによれば資本はつぎのように分類される。すなわち、

- 利用資本
- 営利資本
  - 貸付資本
  - 生産資本
    - 固定資本
    - 流動資本

S.54

労働が自然力の利用から非常に大なる効用を引出すがゆえに、これが固定資本のたすけによって非常におおくのものを給付することに固定資本の最重要なる意味が存する。かかる力の利用と指導とはすべての国民経済の任務であろう。かくてその有利な作用を高め不利な作用を除去するための施設、および補助手段は固定資本のもっとも本質的部分を構成する。

固定資本のもうひとつのもっとも価値ある特性はその永続性である。これによって固定資本はその効用とサービスとを非常に長期にわたって給付することができるのである。これにより固定資本は国民の資本と労働との間の均衡維持にたいして非常に大なる影響をおよぼすのである。なぜならば固定資本は享受財への直接の転換が不

可能であるか、あるいは無益であるような可処分生産物、あるいは直接の充足手段の製造のために有効に使われえないような労働力を国民経済のために利益あるものにする手段をもっている。しかもこれらを保存し保護し、労働の代替あるいは支援手段として将来の生産の完全化に作用しうるような形にすることによって、生産物と労働力とを維持する手段をもっているのである。かくして人はその効用の実現をそれが利益とはならなかった時から利益を充分見込める他の時にうつす、すなわち、人は然らずんば無に帰したかもしくは減少してしまったであろう価値を獲得したのである。

すべての資本はひとまず流動資本として成立する。[1] すなわち、資本は人間労働によって土地から獲得された食料あるいは原材料である自然物として成立するのである。伝来の用語法からあまりかけはなれないようにするために、われわれは「流動」という名称をあたらしく成立した資本のためにとっておくことにしよう。しかしながらすべてのあらたに成立する資本は可処分資本と名づけた方がよいかもしれない。[2] この資本はさしあたり流動資本でもなければ固定資本でもない。なんとなれば両種のうちどちらの種類の資本に使用されるのが最も合目的なのかまだこれから決定しうるし、またしなければならないからである。ついであきらかにつねに流動資本として使用される。かくて最初から可処分資本を流動資本とみてもよいであろう。

1) スミス、国富論、独訳、十四ページ。既述の著作家たちの当該箇所をも参照。

2) ガニール、前掲書、一一九ページではあらたに成立したすべての資本をすでに可処分資本と名づけている。彼によれば経済とは成立したすべての資本の利益ある再生産をなす用途を求めるものである。彼はいう、それら資本を可処分生産物と呼ぼう、と。

すべての新獲得のかかる資本部分は、道具的補助手段をすこしばかり在庫に充当するほか、ほとんど全部が人間の入用の直接的充足に使用されえたかもしれない。さらにこれら資本部分は、もしそれが労働によって永続的形態、すなわち、これによってその消費や使用がより短かい期間あるいはより長い期間にわけられるような永続的形態に変化させなかったならば、使用されたかあるいは物理的になくなってしまったにちがいなかったかもしれないのだ。

六、資本の不断の増加

かくして固定資本の不断の増加という方法によってのみ生産と富との永続的前進が可能である。われわれはこれを資本形成の成果一般として学び知ったのである。経済が阻害なく継続されている場合には、流動資本は毎年すくなくとも前年とおなじ量で再生産されうる。それゆえ物理的不可能性を無視すればかかる形態における流動資本の貯蔵は余分のものであったかもしれない。またその蓄積はそもそも全く無目的であったかもしれないのだ。なんとなれば生計手段は人数によって制限されている分だけしか使用されえないからである。そして再加工の手段のない原材料の大量の集積は全然意味をもたなかったであろうからである。しかし固定資本のみがかかる再加工の手段を増大させるものである。かくて固定資本の永続的増大は進歩している国民経済のひとつの根本特徴となるであろう。その増大を通してのみ流動資本あるいは可処分資本の年々の剰余を有効に投下しうるのである。同時にその剰余を取去ることによって流動資本の前進的成長のためのあたらしい余地を獲得するのである。

一方において固定資本は流動資本の犠牲によって存立するので、固定資本の成立によって流動資本の大部分が無にされることになるのである。他方固定資本は流動資本の後の増大のためには最大の貢献をなす。なぜならば

S.56

利用資本でない限りこれこそが固定資本の本来の目的だからである。しかしながら固定資本の成立はさしあたり財貨を転化させる労働、完全化の労働の入用に負うており、それゆえかなり大規模には国民経済のかなり高い段階ではじめて固定資本が発展するのである。しかし固定資本の意味をひとたび学び知った後では、これを原材料生産活動にもひろく使用しないことは勿論全然不可能である。農業および鉱業における材料獲得の労働は営業活動の開花以来、固定資本の適用拡大によって材料獲得の労働の側にも最大の利益をもたらしたのである。

おなじく固定資本の使用は国民の労働力の不断の完全化のための最も本質的手段のひとつである。これについては次章でたちかえることになるであろう。

かくてわれわれは財貨生産における経済循環というものを発見した。この循環は国民経済の発展とともに益々完成されてきたものである。毎年一定量の原材料が国民の労働によって土地より獲得されるようになる。この半分は多少とも加工された姿でもってこの期間中に入用の充足のために消費されるか（消費一般、普通非生産的消費といわれる）、あるいはすくなくともこの充足を直接目的とする財貨の生産のために加工され、それゆえ現在の姿では無にされる（再生産的消費）のである。このうち加工労働がまだ完全に終っていないがゆえに入用の直接充足のために使われなかったか、あるいは使いえなかったかした部分は流動資本として次年に移行するであろう。その他の半分は固定資本に変化し、これによって本年の消費から取除かれる（もちろん主としてかかる消費のためにこの部分は生産されたのではない）。そして将来の生産にあたり協同すべく運命づけられているのである。

次の年にもおなじ経過がくりかえされる。すでにはじまっているあらたに創出された固定資本の利用の結果、そこには国民の労働がより大なる財貨量を生産するだろうという区別があるのみである。これら財貨はまたこの

S.57

三つの可能なる使用目的に配分される。直接消費のための財貨量は増加し、材料加工労働のための原料もおなじく増大する。そして同時に（前年とおなじ額の他に）あたらしい剰余が提供されるのである。この剰余は次年の労働をよりおおくたすけるための新固定資本として投下されうるのである。かくて過剰節約（Übersparen）能力とともに財貨享受も増大する。慣習的生活様式を犠牲にせずに、むしろつねに厚生の増大するもとで国民は毎年労働生産物のより大なる量を直接消費よりとりさり、固定資本として投下することになる。あるいはおなじことだが労働力のより大なる量を固定資本の生産のために使用し、かくしてその財貨享受を、その経済状態を、さらにはその目的達成を際限ない高さにまで上昇させるのである。

かくて流動資本あるいは可処分資本から固定資本への規則的変換は、高度に発展している国民経済における最重要かつ最有効なる処置のひとつである。

固定資本へのかかる変換は固定資本と流動資本との間に必然的に見出さるべき比例性にその自然的限界をもつであろう。固定資本は流動資本への労働の作用を高めることによってのみ効用を生ぜしめるので、かかる効用は固定資本を永続的に活動しうる状態にしておくに充分なだけ大量に流動資本が存在する時にのみ完全たりえようし、あるいはそもそも出現しうるであろう。[1)]

1) スミス、国富論、独訳、第二巻、一四ページに同様のことが記るされている。いかなる固定資本も流動資本の助力によってのみ所得をもたらしうるのである。

しかしながらかかる限界は決して精確には確定しえないのであるが、一般的にいって全可処分剰余（すなわち従来の生産をなんら阻害することなしに全然自由に処分できる剰余）の固定資本への転換は規則として守らるべ

S.58

きものなのである。選ばれるべき種類の投資の国民経済全体に与える効用がより普遍的なものであれば、それだけおおきな確実性をもって投資が合目的であり利潤をもたらすものであること、それゆえ可処分財貨の価値が資本の効用のうちに保持されることをあてにしうるであろう。ここからわれわれは後に重要なる結論をひきださねばならないであろう。

既述したところからふたつの資本種類には徹底的な相違の存することがあきらかとなった。両者の同等なる併存がゆるしがたいほど、否、両者を資本の概念下に共に属せしめることがほとんど非難すべきものとおもえるほど、明瞭なる相違が両者に存することがあきらかになったのである。

あきらかに固定資本は非常に高度に資本らしい特性をもっている。ひとつの新財貨に転化すること、あるいはその資本の効用をもって新財貨うのちに移行するという点にこの資本特性は存するのである。資本の価値あるいは個々の効用の価値が新生産物の内に完全に保持されており、それゆえあたかも相続人が被相続人の法的人格性を中断しないでつづけるように新生産物が資本の存在をある程度中断することなしにつづける時にのみこれは完全な形で実現するのである。このことはいまや固定資本の場合には流動資本の場合よりもずっとありそうなことだと思われるであろう。すなわち、固定資本はその作用が長期にわたって分配され、それゆえに不況になってもただその作用の一部のみが侵害されるにすぎないというひとつの理由からそうなのである。

流動資本の場合には、とくにかなり高度の経済段階においては、このようなことはあまりありそうもないであろう。流動資本は、それが直接人間の入用を充足する他の財貨へ変形させるために、ただちに利用されるときにのみ資本なのである。[1] それゆえもしかかる一層の加工がおこなわれないか、あるいは延期されたならばその資本

特性は失われるかあるいはすくなくとも弱められるのである。しかも、もし再加工が不利益かつ非合目的であり、それゆえに資本が新生産物のうちにその価値を保持しえないときにはとくに然りである。

1) もし固定資本に変化するならば流動資本は勿論資本のままである。しかしこの変化はまさにここでわれわれが主張しようとすること、すなわち、流動資本としては利益をもたらしえなかったということを証明するであろう。

いまや高度に発展している国民経済のもと、またここから生じたすべての流通関係の錯雑さや大量性のもとでは、既存の流動資本のいかなる変化方法がその資本にとって（すなわち、享受財の直接生産のために）有利であるか、ということを正しく認識しまた決定することはそもそも不可能である。これはとくに個々の企業者にとって不可能である。かくして不可避的に多少ともその流動資本の全部または一部の損失をうんでしまうような工業企業や商業企業が生ずるのである。この場合にはかかる資本は国民経済にとっては無効のものであり、これをつくりだす労働は無益に使用されたことになるであろう。

流動資本のかかる価値破壊にたいする危険は生産の完全化と歩をおなじくして生成する。なんとなれば財貨がより完全になればこれら財貨はそれだけ一層まったく特殊な目的のためにのみ使いうるようになるし、また特殊目的のためのものとされるようになるからである。もし財貨がこれえの購買者を得られないならば、普通この財貨は他のどんな方法によっても有用なものになしえないであろう。しばらくの間だけこの財貨にかなり高い価値を授けるような完全化がしばしば与えられることもある。例えば流行によって財貨がよくみえることなどがこれである。もしこの時期がすぎてしまうとかかる価値の付加は失われ、価値の付加を作るために使われた資本およびそのさいにおこなわれた労働はその価値が破壊されてしまうのである（流行による消費）[1]。もし人がこの財貨を

固定資本に変化させていたならばこれらを維持しえたかもしれなかったのである。すなわち、この場合この財貨は流動資本としての財貨が達成しえなかった目的とおなじ目的のためにさえ保持しえたかもしれないであろう。なぜならばこの財貨は固定資本としていまやこの生産のための入用が生ずる後日に、その生産の完全化のためのサービスをなしうるからである。そしてその都度の入用が向けられている各種財貨の生産のために利用されうるであろう。

1) ラウ、経済学、第一巻、四二一ページ参照。

流動資本にたいしかかる危険を増大させるおそれのある、より完全なる財貨生産へのこの不断の前進というものは、いまや家父長的牧歌状態 die patriarchalische Heerdenzustände への非常におおくの信奉者が今日の近代工業の隆盛にたいしレッテルをはろうとしているような反自然的、恣意的かつ病的現象では決してない。むしろこれは国民経済概念より必然的に生ずるものであり、その入用をつねにより完全かつ無欠に充足しようとする全人間の根本衝動のいきいきとした実現であるにすぎない。

S.60

## 七、新資本の使用

上述したところからわれわれは従来充分に評価されていなかった資本学説のもうひとつの根本原則に到達することになる。なんとなれば、人々はまさに国民経済を生き生きとした前進的なものであるとは見ず、それゆえ国民経済の法則を、本質的に唯一の法則である発展法則として把握しなかったからである。この重要な原則とは次のとおりである。すなわち、国民経済の完全化とともに永続的に生ずる新資本は大体においてつねに従来のものよりもより高い、ないしはより完全なる財貨の生産のために使用されねばならないか、あるいは従来の財貨の財

貨特性の完全化のために使用されねばならない、と。かくしてのみあきらかに個々人および総体の経済状態の改善というものがなされうるのである。なんとなればある財貨の入用、すなわち、それへの需要には、その財貨と人間的諸入用との関連からひかれた限界というものがあるからである。この限界をこえた財貨生産のすべては経済的損失というものであろう。この場合にはより大量の財貨はほぼ以前のより少量のときと同価値しか保持しないからである。この剰余の生産のために使用された労働はより有効に、あるあたらしい財貨の生産のために使用されたかもしれないのである。もしある国民があたらしく成立した労働力と資本とのすべてを、その国民が大古の生活をつづけるための全入用を充足するに充分であったような原始的生計手段の増産にのみ使用しようとしたとするならば、国民はいつでもこの最低段階の形態を脱しえないままでいたかもしれない。そして資本と労働力との生成はやがてとまってしまったであろう。しかしこれは人間本性の根本特徴にもとるものである。それゆえおのづからより高度な財貨の生産への不断の前進がいたるところにおこるのである。

かくて財貨は一定の序列をとるにいたる。この序列に従って財貨の入用とこれにともなう財貨への需要とが文化の発展とともに漸次出現しはじめるのである。[1] しかし若干高い発展をとげている場合には全体としての国民が時とともに経験したこのさまざまな文化諸段階は、同時に一国民の内部での種々なる階級のもとでも存在するのである。これら諸階級の各々はそれぞれの階級にとってより高いものである新種の財貨の獲得に努力する。その限りにおいて各階級はすでに獲得しているものよりも一段上の地位を得るのである。それゆえ様々なる種類の財貨獲得への同時的努力がおこなわれ、そしてこれは新入用のおこった財貨クラスへの正しい認識をひどくくらましてしまうのである。しかし全階級の同時的前進はつねに一段高い地位の後をつぐことになるので、ひとつのこ

と、すなわち最高階級のためにはまったく新段階の財貨生産をなさねばならぬということ、すなわち、一般にはより高いより完全な財貨を生産しなければならないということが直ちにあきらかとなる。そしてこれはいうまでもなく自らひとつの経済的必然として生ずるのである。なんとなれば各階級はその労働およびその資本にたいし各階級の希求している財貨の生産という方向を与えるがゆえに、たとえ各階級がこれを直接生産しないとしてもこの財貨への需要を惹起させるからである。

1) セエ、前掲書、第一巻、一三一ページ、およびロッシアー、体系、第一巻、第一節、参照。ロッシアーは幸いにも文化段階の差異の影響をきわだって顧慮している。

国民経済を漸次一段一段と上昇させる、かかるひそかにおこっている経過をわれわれは若干詳細に考察してみなければならない。なんとなればこの経過は驚くべき現象に解明を与えるであろうからである。すなわち、高度に発展している国民経済のもとでの公債手段から生ずるような巨額の財貨が、国家の理念的諸目的のために提供されるという現象、しかも課税の場合のような強制によって貢納者がそれにかりたてられることなしに〔国家の理念的諸目的のために〕自由に提供されるであろう、という現象に解明を与えるであろうからである。

ある国民の発展の端緒において、したがって農業が主産業のもとでは徐々に成立した可処分資本は日常の生計手段の生産にあたって農業の中に投資口をみつけうるし、また現実にみつけねばならない。ついでこの可処分資本は、自らこの生産をおこない、この生産の生産物を彼らの増加した人数のために使用する人々のもとに成立させるのである。

しかしながらさしあたり、もはや農業には有効に投下しえない剰余が漸次形成される。なんとなれば人口は資

本とおなじ速度では増大しえないからである。しかも資本をもっており、したがってこれによって増大した財貨ストックのために生産物へのあたらしい需要を高めることが可能な人々にはすでに従来の生計手段が充分供給されているからである。それゆえこれら剰余はあたらしい入用を満足させうる新財貨を要求する。そしてその生産のために新資本が使用されるのである。材料を変形し加工する労働が原料生産的農業からはなれ独立的に一層の発展をみるにいたる。これによって生ずる労働者への需要はこの労働者のために必要なる生計手段を調達することを余儀なくさせられ、かくて原始的生産物への強力なる需要を形成し、ついで新資本をふたたび農業に投下させることを有利にさせるのである。なんとなればかかる「手工業」段階においては手労働はもっとも重要なものであり、それゆえすべてのより高い発展は生産手段の増産にかかっているからして、大部分の新資本は土地改良としての農業生産の生産性向上のために投下されるようになるのである。

かかる資本使用が長期にわたってやまぬものであり、利益がありかつ価値創造的であるにもかかわらず益々おおきくなりかつ年々成立する資本量を資本使用がもはや受け入れられない時点に徐々に到達する。既存の入用を充足した後には最も合目的的投資口が発見されねばならないところのつねにおおきくなる剰余が可処分のままのこるようになる。いうまでもなく食糧の増加分を消費したえかもしれないし、また消費したいと思っていたかもしれない人間が最下層の、極貧の階級の内にはつねに存在する。しかしかかる人間は強力なる需要を形成するものではない。彼らはなんらの対価をも提供することができないからである。それゆえこの可処分剰余の資本化のためにはこの剰余を固定資本として投下する道が唯一のものとして提供される。とくにつねにより完全なる生産物の生産のためには、すなわち、つねにより高い（以前の段階では存在しなかった）入用をみたすためには、また

S.63

そもそも全国民経済の収益向上のためにはそうである。個人的利益になったという理由をもって以前の不完全なる状態を維持しつづけようとする意志と抵抗とがしばしばあるにもかかわらず、これはいわば前進を強制されているのであり、それは自然的必然性をもって前進するのである。諸国民は根っからの百姓根性や旧弊な根性から出発してつねにより自由なより完全な生産力の展開を状態の圧力からもぎとってゆくのである。

高度に発展した国民経済においては大部分の資本は工業者階層および商人階層の人々の手中に成立する。なんとなれば彼らのもとでは自然諸力のより大なる、またより合目的なる利用のために既存資本を使用することによって（ほとんど知性のみにもとづく）労働が非常におおくを生産し、それゆえ農業の場合よりも入用をこえた剰余がおおく作りだされるであろうからである。かくしてその高度に訓練された労働力によって彼らの入用をもっとも完全に充足することによって、この階級は経済的観点においては最高にたつ人々であり、それゆえ彼らがただちに獲得した剰余をもって新財貨を生産しようとすることはまったく自然であろう。

しかし、もしあらたに成立した資本の所有者がこれをやはりすべてすでにより高度かつ完全であったすでに生産された財貨の増産のために使い、また富裕階級としての新資本の所有者自身がいままでひとりで消費しており、他の人々がこれから除外されていたような従来よりすでに生産していた財貨の増産のためにこの資本をつかおうと欲するならば、もしこの意図が遂行しえたかもしれない場合には、この財貨をより大量に生産したかもしれないであろう。しかも有効需要が全然増大しないか、あるいはほんのすこししか増大しないために、この財貨の価格は売手の競争によって異常に下げられたであろう。もし無分別にかかる財貨の生産を続行しようとするならば、すなわち、国民のすべての階級にこれを享受させようとする意図をもっている時には、人はこの財貨の最

後の量をまさにくれてやってしまわねばならなかったであろう。そうでない場合にはかかる財貨は経済的に破滅し、その財貨としての特性は失われてしまう。なんとなればこれら財貨は入用の充足につかわれえないからである。これら財貨はおそかれはやかれ破壊的自然力によって物理的にも破滅させられたかもしれないのである。しかし贈与行為によってわれわれは相互給付による流通に基礎をおくすべての国民経済の地盤を完全に離れてしまう。また生産費減少の結果としてではなく消費者の無能による価格引下にともなって、その時の最低の生産費を償うべき事態がおこってくる。かかる価格低落は国民経済にとって純損失である。にもかわらずかかる生産をつづける者は徹頭徹尾非経済的に行動するものであり、一般生活においては馬鹿といわれるであろう。

しかしもし誤り導かれたる人間愛によってのみ与えうるかもしれぬ、かかる意図の遂行可能性をも肯定するならば、かかるクラスの財貨の生産は、国民中のすべての個人にこの財貨がゆきわたるまではつづけられるかもしれない。それでもなおその後はより高いクラスの財貨の生産に移行してゆかねばならないであろう。

しかしかかる経済的措置が実行不可能であるのは上述の理由からだけではない。すなわち、ひとつの財貨がそれへの欲求を感じない人々、それゆえその財貨を生産することが本来価値否定とおなじである人々にとってなんら効用がないからという理由だけではない。のみならず自分になにも収益をうまないような資本を誰もが集めえないがゆえに、これは全然不可能なのである。節約への衝動はなにもなくなってしまうのである。かなり貧困なる階級に喜捨しようとする人はこれを直接にするであろう。しかしそれを買いえない貧困なる階級の人々のために生産したいからといって、利子報償がなく、また資本の損失が確実であると予想されるのに一企業者（あるいは一社会主義的機構）に彼の資本を委ねるものはいないであろう。

元来発展した国民経済のもとでは生産は需要によってその照準が決められるようになる。すなわち、あたらしく土地より得られた可処分資本がつねにつぎのような財貨に転化する財貨が不断にあらたに生産されるようになるのである。すなわち、所得増加というものによってより大なる需要をひきおこすことを可能にさせられる人々の努力が向けられるような財貨がこれである。しかしかかる所得の増大は、直接的であれ間接的であれ、あたらしく成立したかかる可処分資本の量によってのみ生じうるであろう。彼に強いられている利潤を得ようとする各企業者の自然的関心、また彼が販売を期待してもよい財貨のみを生産しようとする各企業者の自然的関心は、一般に必然的結果として生産の方向をきめるようになるのである。企業者たちはいわば需要者の、すなわち可処分資本所有者の代理機関であるにすぎないであろう。企業者たちは彼らによって生産された、しかも従来の形では消費されなかった資本を、その資本の所有者が望み、そのために所有者がその資本を形成する材料と財貨とをそもそも生産し保持ようとしたところの新財貨の形態に転化させることを引受けるのである。

S.65

かくして国民のかなり富裕な階級のそれぞれはいわば分離した経済を独自にいとなむことになる。この階級は彼らの経済活動と彼らのすでに所持している資本の作用とによってつねに新資本をうみだす。すなわち、新原料と労働者のための新生計手段とをもたらすのである。そしてこれら階級は、新材料や労働者の生計手段としての財貨の一定種類が彼らの需要に転化すべきその需要によって規定される。そしてこの階級は企業者にたいして労賃を追加しながら、新資本を譲渡するにあたってその資本にかわってうべき対価をもってかかる財貨を購入する。

それゆえ高度に発展した工業国、商業国における富裕階級はつねに従来の財貨よりより高い、より完全なる財

貨の獲得と享受のために前進する。そしてたいして富裕ではない諸階級は、最低の階級にいたるまで漸次、その財貨の獲得や享受の点では相応の距離をもって富裕階級の後に従うのである。この最低の階級は生活と労働との維持のために必要なる入用をつねにおなじような方法で充足するのみであり、それゆえにこの点をこえては前進しないのである。かかる停滞状態の根拠は資本の欠乏にある。最低階級は所得として獲得したものすべてをつねに直接的享受の形で消費してしまう。かかる最下層階級というものはつねに存在しておらねばならない。ただおなじ個人や家族がつねにおなじ最下層階級であらねばならないとはいえないだけである。すなわち、いま最低階級を構成している人々が資本蓄積と労働活動の改善によってこの階級をこえて高くなることをはじめるやいなや、かかる資本生成のために労働者への需要がおこり、かくて国民増加にたいする余地、かかるもっとも普通の衝動を充足するためにつかわれる余地というものが生ずるであろう。そしてもし生計手段のための資本が彼らにかつがつの生計資料を提供しうるならば、つねにかつがつの生計で満足している新労働階者級が現実にも成立する結果となる。しかもこれは出現することになるであろう。なんとなれば資本増加をかかる生計手段の生産あるいは製造につかうことが利益となるからである。同時により富裕な人々は原料と生計手段の剰余をうみだし、後者の労働力をもって原料を新財貨に変形するための活動をなそうとする性向をもつからである。

われわれは一大国家支出とこれを可能にする公債制度が労働者階級の利益を害するかもしれないというふうに信ぜられている見解の誤っていることをしめすためにこのことをもっと詳述すべきであったかもしれない。[1] 〔しかし〕これは一般的に妥当しないであろう。このために使われた資本はさもなくば労働者階級のための財貨生産に使われたこともなく、むしろより高い階級のなにか他の新需要充足のために使われたかもしれないのである。

S.66

いずれにしても最下層・最貧困階級というものは存在するであろう。

1) とくにミルの原理、第一巻、九四ページ以下および一一三ページ以下で強調されている。ミルはチャーマーズ(Thomas Chalmers)の〔非生産的経費支出はその全額を租税で調達べきであるという〕見解をのべているが、その実際の正当性にはつよい疑念をもっている〔ミルは実際の事態は非生産的経費を公債で調達しても労働者に損害を与えないことがおおいと考えているのである〕。

## 八、非物質的財貨

その生産のためにあらたに成立した可処分資本を使用すべきより高度の財貨は、単に物理的入用をより完全に充足する財貨のみではなく、その財貨の益々増大する部分は非物質的財貨から成立しているのである。たといより低い階級がまだ粗雑な物質的財貨への大なる入用を充足していないにしても、より高度の財貨生産に移行せねばならないのである。なんとなれば一層の加工のために新資本を創造したより高い階級は粗雑な物的財貨をすでに完全に供給されているからである。

物質的・具相的財貨の消費にはたといかなりひろいものであってもその限界がある。たとえば最大の努力をはらっても人間は食糧をその肉体が摂取することができる以上のものを消費しえないであろう。のみならず文化がある程度発展している場合には人間のより高い本性は非物質的財貨を、人間のより高い感覚のための充足手段を得んと努力するようはたらくであろう。「人間的入用の充足のためにあきらかに使いうるもののすべては、かくて財とみなされることになるであろう」(ロッシアー)、と。

本来人間がその物質的・物理的存在の維持のために必要なものとして使用する財貨のみを物質的財貨として考

察してよかったかもしれない。なんとなれば人はその他の財貨のうちに単なる物質より若干上のものをみとめ享受するであろうからである。露命をつなぎ労働力を維持するに絶対必要なる財というものは、一国民の文化がある程度高度の場合に存在する財貨全体のただ非常にちいさな部分をなすにすぎないのである。国民経済の最も低い段階ではこれはいうまでもなく原始的な形でのかかる必需品の生産に制限されている。しかし国民経済はすぐにこれを放棄するであろう。なぜならば国民経済の本質は発展であり進歩だからである。人間はもはやその入用をともかくも充足しようとするのではなくて、人間のイデーの内に形成されその人間の活動の目的として提供されているある特定の方法でその入用を充足しようとする。[1] かなり高度の段階における経済的努力はとくに財におけるかかる観念的付加物の達成に向けられるのである。[2] たとえば身体をおおうということには全く役立たない服地の染色について考えてみよ。美的感覚の充足はここでは経済目的となっているのである。しかし美というものは事物の素材的性質にあるのではなく、その形式、形態、その外形的現象に存するのである。かくて美的感覚の充足は非物質的財貨というものなのである。

1) ストルヒ、前掲書、第一巻、五〇ページの場合もおなじである。「自然人はなんとか自己保全のための備えをするようになるやいなや、このために自分の役に立つ対象物を選択するにあたって、すでにある種の洗練さを加味するのである。彼にとって、ただ生存するだけではもの足りず、彼は快適に生存したいと欲するのである」。

2) もしわれわれが全スミス学派の基礎にある物質的財貨概念の誤謬を微に入り論証しようとするならば、それはあまりにも横道にそれすぎるであろう。国民経済学においてこの概念を貫徹させることはわれわれにはまさに不可能のことのようにおもわれる。ロッシァー、体系、第一巻、九六ページ以下参照。バイオリン工場主の生産物が奏者によって

奏される以外の目的をもっていないにせよ、バイオリン工場主の労働が生産的でありバイオリン奏者の労働が非生産的というべきであることは如何に奇異であることか（ガルニエー Joseph Garnier）。

一国民の文化が向上すればするほど、人間精神が国民中に発展すればするほど、それだけ国民の経済的生産において生存のための生計に役立つのみの目的よりもこの非物質的目的が優位にたつのである。この場合には大部分の財貨においてかかる非物質的価値が物質的価値をずっと凌駕しているのである。

精神的文化の一層の進歩と、当然これにともなって同時に生じた物質的補助手段の増大にともなって、かかるより高い人間の精神的感覚をさしあたり必需品に使う財貨への単なる付加物によって充足するのみでなく、むしろすべての必要に迫られての入用を全く無視し問題にせずに純粋にそれ自身のために充足すべき入用と努力もまたついで成立する。文化、人間の精神的自由はその頂点を芸術のうちにもっているのである。

しかしながら国民経済のそれぞれのかなり高い段階では、すべての財貨、最低の入用に使われる財貨でさえも、もはや純粋に具相的財貨ではない。むしろ〔これは〕非物質的付加物をもっているのである。おなじく他方人間のもっとも理念的もっとも非物質的目的もまた物質的基礎というものなしには、〔また〕この目的のためにすでに生産していた具相的事物、すなわち資本の支出なしでは実現されえないであろう。芸術はある素材と道具およびこれをおこなう芸術家のための生計手段を必要とする。多数の人間にとって最高の理念的財貨である宗教的感情の満足のためには、教会、教会の什器および僧侶のための生計手段の存在が要求される。

S・69

かくて経済的文化の向上とともに益々大量の可処分財貨準備が非物質的財貨の製造のための資本として投下されるようになる。なんとなればそれは人間の精神的入用充足のために必要あるいは有用なる仕事をするような財

貨に転化されるからである。かなり高い文化のもとではかかる財貨は固定資本の一主要部分を形成することになるであろう。なんとなればかかる財貨はそれ自身が、また精神的入用を充足するためにという使命に従ってその素材とともに享受する人によって、あるいは享受する人について、具相的に消費されるからではない[1]。むしろこのような使命をひとつひとつ実現した後も変化なしに存続し、しかもおなじ役目をくりかえし遂行し通常非常に多数回しかも多数の消費者に給付しうるからである。かくしてこれら財貨はとくに総体経済の目的に適合している、なんとなれば個々人はその財貨を目的適合的方法で製造することをしようとしないし、またその手段をもたないからである。それゆえわれわれはこれらについて次章でふたたび論ずることにしよう。

1) ……いかなる物質的実体にも結びつけられず、また合体されることのない非物質的生産物。セエ、前掲書、第一巻、二九五ページ。

## 九、利用資本

財貨から直接に人間の入用充足をうみだす効用を引出す限り、おなじ理由からかかる財貨は利用資本に属するのである。利用資本はかなり高度の段階ではつねにより大なる重要性と普及とを獲得する。なんとなれば純精神的享受と目的、ならびに非物質的享受と必要なる入用の充足との結合による物質的消費の精神化はここでは国民経済の主要目的をなすからである。既述のような固定資本の不断の増大にもとづく国民経済の完全化は、かくてとくに利用資本の増大によってもうまれるであろう。利用資本の蓄積によって富める国民と貧乏な国民とが区分され、また同時にこれによって富める国民が一層前進してゆくのである。なんとなれば富める国民はかくして充足手段を益々大量に自らの手に集めるからである[1]。

S.70

1) ロッシアー、体系、第一巻、六七ページにはつぎのようにのべられている。「生産資本と比較しての使用資本の巨額さは、高度に発展した国民のもとでは巨額の富の確実なるしるしとして通用しうるのである」、と。

開化した人間の非物質的財貨のうちで最重要なもののひとつは、個人的自由の阻害なき行使ならびに安全性と安らぎとの感情、とくに文化生活の阻害なき永続への確信である。かかる財貨なしには開化した人にとって人生はなんら価値のないものとなってしまうのである。これら財貨はかかる人間にとって他のすべての財貨の享受を条件づけるのである。あたかも人間はかかる財貨を全くみづからその内部に持っているかのようにみえるであろう。しかしそうとはいえないのである。個人的自由はいうまでもなく人間の本質的構成部分として人間に生得的に与えられた権利である。しかし他の人々はその阻害なき行使を何時でもその人間から奪いとりうるであろう。個人的自由をまもるもの、それゆえ個人的自由を調達したものは国家であり、また国家秩序なのである。かくて国家はこの人間にとっては利用資本として出現する。この利用資本から人間は永続的効用を引出し、かつこの効用を直接に個人的自由などの非物質的財貨の形で享受し消費するのである。[1)]

1) かかる財貨の重要性はヘルマン、前掲書、二ページでとくに強調されている。すなわち、「社会が個人に安全を保証し、営業を可能にさせ、友情と家族生活とを享受させ、また最後に学問的・教会的共同体を提供するようなサービスの永続的相互性は最高級の外的財貨を形成する。もしわれわれがこれを生活状況という呼称で総括するならばこれは法律、営業、交際と愛、学問と宗教の関係のうちに完全ふくまれるであろう。

かくしてわれわれは資本概念のあらたなる拡充を発見した。自らは物的素材あるいは具相的財貨であることなしに永続的な利用あるいは一層の財貨生産の基礎をなすものは資本でありうる。これがより早い時期の労働生産

物の転化によって成立したことだけが〔この資本にとって〕必要なのである。かくしてすべての資本とおなじくこの資本も財貨の移行形態をなす。なんとなればこの資本の媒介によってその資本の製造のために使われた財貨が、その資本の協力によって成立しているところの、すなわち、その資本の効用が移行した財貨に転化するからである。このような資本をわれわれは非物質的資本と名づける。国民経済に対して有利に作用し、その生産性を上昇させ、かつこの財貨の支出で作り出されたすべての状況ないし状態は非物質的資本に属する。かくてこの消滅した財貨の価値は永続的効用の基礎として、かかる状況がうみだした財貨生産の増大という形で保持される。

十、非物質的資本

かかる非物質的資本はたとえばある店の「のれん」、独占等々の形で個人もまた生産しうるし所有もしうる。[1] しかし事物の本性上非物質的資本はとくに総体経済によって生産または利用されるのに適しているのである。なんとなれば非物質的資本はその影響を主としてすべての個別経済に平等におよぼすからである。それゆえ一国民の最大の非物質的資本として国家が出現し、国家はその存立によって国民の高段階への発展をはじめて可能にさせるのである。かくてわれわれがその特性をすでに記るしたように国家は単に利用資本たるばかりでなく、とりわけ生産資本でもある。国家が個別経済に与える保護と支援によって一般国民経済におけるその他の財貨の生産を特別に促進する限りそういえるであろう。

1) ヘルマン、前掲書、五六ページ。ロッシャー、体系、第一巻、六四ページ。

あきらかにかかる非物質的資本はある意味では端緒より存在していたものである。なんとなればすべての国民経済は本来人間の社会的共同生活の状況にもとづくものであり、これによってその生産力の適切なる共働をつく

S.71

りだすからである。ただかかる関係は低い発展段階では主として経済的意図をもって、あるいはすくなくとも財貨の支出というものによって作られるのではない。むしろこれは主として暴力的圧迫の結果である。かくて通常国民の一部のみのために他人の犠牲において生ぜしめた利益は、暴力的取得として資本利益とおなじものとはみとめられないのである。にもかかわらずかかる状態、たとえば農奴的状態、硬直的ツンフト強制の状態などは、より初期のバラバラな状態にくらべてある程度発展した経済にとって利益があった。これら状態はひとつの必然的過渡段階を形成したのである。

しかしながら、各人が自己の活動の成果を全部享受するような文化の上昇とともに、流通を促進するかかる状況はただ労働の支出と既存の財貨の支出によってのみ達成されるようになる。これら状況が将来の生産により高い価値をつくりだすということがきまっているがゆえに、これら状況は資本の性格を完全にもつのである。販売の確実性、流通の容易化は単に個別的営業者に有用であるばかりでなく、むしろ財貨の価格低廉化にしめされるように全国民経済にとっても有利なのである。なんとなれば販売量がおおい人は財貨のひとつひとつにたいしてはよりちいさい商業利潤で満足するからである。同様にすべてのある程度高い国民経済の根本原則である分業と協業とは、おのづから生ずるものではなく、しばしば大なる支出によってはじめてうみだされなければならない状況を前提とするのである。とくに他種の状況が以前より障害となっており、その状況が同時にすでにその状況の所有者にとって非物質的資本となっているところでは、そしてたとえば、営業経営のための物上権利〔たとえば薬局をひらくことのできる権利をもつ土地など〕のようにそれが長い間手から手へと交換されてゆき、具相的財貨と交換されるところではそうである。

S.72

それゆえ流通のための全構築物、あるいはすくなくとも、これが端緒より存在したとみられるかぎり、意図的にかつ財貨支出によってなされたすべてのそれの改善は、国民の非物質的資本とみなされねばならない。この非物質的資本は全国民経済の収益増大という形で利子をうむのである。これにはとくに社会生活にたいする非合目的的制度の合目的なものへの転化のための支出があげられる。たとえばツンフトから営業自由へ、独占の廃止、たとえば十分の一税などのように無雑作には廃止しえないような国民経済の発展を阻害する負担の解消がこれに属するであろう。かかる支出のすべては後の生産よりの収益増加という形で再生されるのである。

具相的財貨の非物質的資本へのかかる転化はあきらかにある程度の富裕、物質的財貨のある不要な部分の存在を前提としている。そしてそれゆえに広範囲にわたってはこの転化はただかなり高度の国民経済段階においてのみおこなわれるのである。しかし巨額の新可処分資本が年々成立し、かつますます大量に生産されうるようなかなり高度の国民経済下での急速なる生産性上昇のもとでは、巨額の可処分資本のための利益をもたらす投資がみいだしうるや否や、その一部の投資は非物質的資本あるいは（既述した）一般的利用資本として国民経済の阻害なき進歩のための唯一の可能性と不可欠の条件を構成するようになる。なんとなれば物質的・具相的財貨の消費は既述のようにその必然的限界をもっているからである。

これに反し人間の発展努力には限界はない。これは際限なくつづくものなのである。それゆえいうまでもなくかなり高度の国民経済段階でもその拡充への努力と願望とは決して消えることなくいやましに強くなるである。かくていまや強化され完全化された労働によって新財貨量をつくりだし、これを従来の国民経済、流通、生産の状況ないし状態を拡大するために、あるいはいずれにしても縮少することなく維持するためにも使うようにな

S.73

る。必然的に非物質的資本を増加させるようになるのである。なんとなればもし国民経済が拡大さるべきであるならば、従来国民経済の基礎をなしていた状態が拡大されねばならぬことは自らあきらかだからである。

かくていまやその完全性に生産諸力の協同における成果の大きさと交換流通の効用のおおきさのかかっている国民の個々の構成員間の関係はもっとも発展し、改善されるようになるであろう。とりわけ上述したふるくからある生産を阻害する社会的制度をより合目的、より時宜にかなった制度に転化することがいまやうまれるであろう。さらに新材料の発見と自然力のより合目的利用のための新手法の案出によって、新財貨あるいは従来の財貨をより大量につくるためにさらにおおきな支出をなすようになるであろう。かかる目的のための支出は国民のための非物質的資本として国民の将来の労働の生産性向上という形で保持される。これについては次章で詳述しよう。もし新発見が秘密保持によって個人の所有のままであるならば、発見は個人にとって営業秘密として非物質的資本をなす。この資本はこれによって生産された商品の価格が上昇するという形でその利益を実現する。かくてこれによって疑いなく資本として認識されるのである。

しかしとくにいまやまだ資本の利益ある投下のための広い領野の存する外に目が向けられるようになる。しかるに内部では、すなわち自国においてはすべての状況が高度に完成されているがえゆに、新可処分資本の投下はますますわずかしか利潤をうまなくなるであろう。それゆえに自国の国民経済にとってよりよい注文先と販路とを獲得するために他国との通商関係を発展させるよう求めることになるのである。巨大企業がかかる領域の発見と占有とをなすようになるであろう。すなわち、この領域はまだどの国民にも決定的に占有されているのではなく、かつ植民地として母国に新原料、すなわち新資本を与えうる、したがって母国の労働力をよりよく利用しう

S.74

る機会を与える領域なのである。かかるよい状況を必要とあらば暴力で他国からうばうために、あるいはもしそれをどの国も所有していないか、あるいは弱小国民が所有している場合には同様にこれを要求しうるにいたるほど強力な他国に対抗してこれを要求することを可能とするために、国の戦力をとくに増強することになる。なんとなれば国民間では必然的に力の法則が決定するからである。ヨーロッパ諸国にとってはそれらの国々の位置からして海の力、艦隊と商船隊とが、かかるさまざまの有利さを達成するためのもっとも主要なる手段である。この有利さにこそ各国の国民経済の一層の発展はかかっているのである。

かかる目的のすべてはあらゆる種類の財貨への巨額なる支出を必要とする。もし企業あるいは企画が合目的に計画され遂行され、しかもこれに応じて希求された成果がうまれるならば、その支出は非物質的資本としてその価値を保有し、国民が財貨の増産という形で享受する永続的利用のための基礎となるであろう。

このような理由よりこれら財貨は一般的利用資本とおなじくとくに総体経済の対象に適合的となる。個々人はこれら財貨を非物質的資本の形態で投下するために必要な手段と意志とをもっていないであろう。しかし総体経済にとってはこのふたつの資本種類、すなわち、一般的利用資本と非物質的資本とは最重要の目的と内容とを形成する。両者は資本発展の最高の形態をなし、またもちろんその実現のためにこれらに相応しい国民経済の形態、すなわち国民経済の最高の形態を要請する。これはすべての人の共通目的達成のための力の直接的結合と集中としての総体経済である。かかる集中によって全国民経済の生産性がいかにおおきく高められたかということは既述したとおりである。それゆえ大体非物質的性格をもつにもかかわらず、この両資本種類は一国民の物質的富の原因および結果としてときがたい相互連関性をもっているのである。

両資本は国民資本の最も本質的部分を構成しているのでわれわれはいまや国民資本の考察へと移ってゆこうとおもう。